

## I-1 注意課題における失語症患者の成績

○大貫 典子<sup>1)</sup> 立石 雅子<sup>1)</sup> 千野 直一<sup>1)</sup> 鹿島 晴雄<sup>2)</sup>

【はじめに】 脳機能障害の一般的な症状である注意障害に関する研究では、失語症患者は対象から除外されることが多く、失語症患者における注意障害の実態は明らかにされていない。今回我々は失語症患者に数種の注意の検査を実施し、その結果について検討したので報告する。

【対象】 対象は当言語室で訓練中の失語症患者33名で、全例失行、失認、視覚的問題、著明な知的低下、前頭葉損傷を認めない。内訳は失名詞失語15名、Broca失語10名、Wernicke失語8名。年齢とSLTA得点は群間で有意差を認め、平均年齢は失名詞失語群が51歳で、Wernicke失語群の64歳より有意に若く、SLTA得点の平均は、失名詞失語群は214点で、Broca失語群、Wernicke失語群より有意に高い値を示した(表1)。これらの対象に5種の注意の検査を実施した。なお対照群として、鹿島ら(1986)の健常データを用いた。

表1 対象

	例数	年齢	Kohs IQ	SLTA
失語群	33	55	95	184
失名詞失語	15	51	103	214 <sup>**</sup>
Broca失語	10	56 <sup>**</sup>	90	163 <sup>**</sup>
Wernicke失語	8	64 <sup>**</sup>	87	152 <sup>**</sup>
健常群 <sup>(1)</sup>				
64歳以下	10	48		
65歳以上	15	70		

(1) 鹿島ら(1986)のデータによる \*\* p<0.01

【方法】 1. 数字抹消検査。52列6行に並んだ数字の中から目標3を左から右、上から下へ順に消していく課題。目標3は1行に19個あり、目標3を見落とした数(omission error)、目標3以外を抹消した数(commission error)、および正

答率を算出し、所要時間を計測した。2. 文字抹消検査。数字抹消検査と同様の方法で平仮名の「か」を消す課題。3. symbol digit modalities test。WISC-Rの符号問題を逆にした形式で、90秒内の到達数、および正答率を検討した。4. perceptual speed。目標となる数字が行毎に変化する数字の抹消検査。2分30秒内の到達数と正答率を検討の対象とした。5. trail making test。partA) 1~25までの数字を順につなぐ。partB) 1~13までの数字と「あ」~「し」までの仮名を交互につなぐ課題。施行時間をはかり、partAとpartBの施行時間の比率を算出した。

【結果】 表2は失語群と健常群の成績を示す。数字抹消検査、文字抹消検査およびperceptual speedにおける失語群の正答率は良好で64歳以下健常群とほぼ同等であった。一方所要時間に関しては、失語群は健常群より長い、あるいは制限時間内到達数が少ない傾向を示した。symbol digit modalities testでは、失語群は、正答率、制限時間内到達数ともに、64歳以下健常群と65歳以上健常群との中間の成績であった。以上の4つの検査では、失語群は正答率は全般に良好だが、健常群に比べ時間がかかる傾向を示した。trail making testについて、今回はpartBの施行が可能であった26例のデータを用いたが、partA、Bともに64歳以下健常群に比し施行に長い時間を要した。さらに、partAとBの施行時間の比率は、健常群は2群とも1.4だが失語群では1.7と高く、失語群は仮名文字の混在したpartBで、施行により時間がかかることが示された。

次に失語型別に成績を比較した(表3)。正答率は失名詞失語で最も高く、次いでBroca失語、Wernicke失語の順であったが有意差を認めなか

1) 慶應義塾大学医学部リハビリテーション科

2) 同 精神神経科

表2 失語群と健常群の成績

	数字抹消検査		文字抹消検査		perceptual speed		symbol digit modalities		trail making test		
	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	到達数	正答率(%)	到達数	partA 時間	partB 時間	比率
失語群	99	163	96	190	98	415	96	30	167	278	1.7
健常群 64歳以下	98 **	90 **	97 **	98 **	98 **	657 **	99	53 **	85	117 **	1.4
健常群 65歳以上	92	141	90	159	94	432	94	21	218	327	1.4

\*\* p<0.01

表3 失語型別検査成績

	数字抹消検査		文字抹消検査		perceptual speed		symbol digit modalities		trail making test		
	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	到達数	正答率(%)	到達数	partA 時間	partB 時間	比率
失名詞失語	99	133	96	154	99	492	99	37	155	216	1.4
Broca失語	99	164	97	194 **	99	367	95	25 **	187	303 **	1.6 **
Wernicke失語	98	216	93	254	97	322	94	21	181	410	2.3

\*\* p<0.01

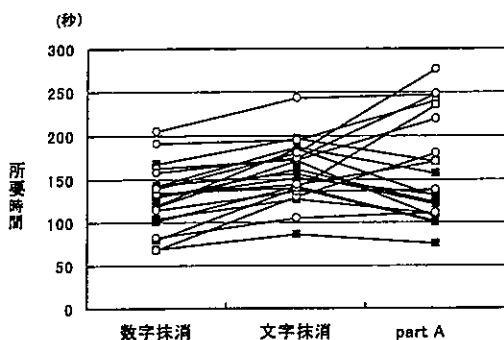


図1 所要時間のパターン  
■: 文字抹消群 ○: part A群

った。所要時間は失名詞失語で最も早く、次いで Broca 失語、Wernicke 失語の順であり、Wernicke 失語は失名詞失語より有意に時間がかかる、あるいは時間内到達数が少ない結果を示した。trail making test partA と B の施行時間の比率も、Wernicke 失語は失名詞失語、Broca 失語に比し高く、仮名文字の処理を含む課題において、他群より時間がかかる傾向が顕著であった。しかし Wernicke 失語は平均年齢が有意に高く、また SLTA 得点の平均も有意に低く、これらが影響を及ぼしていることも否めず、今回の検討では失語型による差異は明確にならなかった。

次に所要時間を計測した数字抹消検査、文字抹消検査、および trail making test partA につい

てそのパターンを検討した (図 1)。その結果は、数字抹消検査と文字抹消検査では各症例とも文字抹消検査でより時間を要したが、文字抹消検査と trail making test partA では、山型のグラフ (■) で示される文字抹消検査に最も時間を要する症例 (以下、文字抹消群と略す) と、右上がりのグラフ (○) で示される trail making test partA に最も時間を要する症例 (以下 partA 群と略す) に 2 分された。文字抹消群は 13 名で、失名詞失語 7 名、Broca 失語 3 名、Wernicke 失語 3 名、一方 partA 群は 14 名で、失名詞失語 5 名、Broca 失語 5 名、Wernicke 失語 4 名であった (表 4)。文字抹消群は partA 群に比ベ有意に若く、Kohs IQ が有意に高い値を示した。一例として文字抹消検査の成績を表に示したが、文字抹消群の方が、全般に所要時間が短く、しかも正答率が高い傾向を示した。但し、trail making test partA と B の施行時間の比率は、文字抹消群の方が partA 群より高く、文字抹消検査に最も時間のかかった文字抹消群は、trail making test partB においても、仮名を意識して課題を施行していることが窺われた。平均年齢が若く、IQ が高い失語患者の中に仮名の処理に特に時間を要する症例がいることが推察された。

次に誤答について検討した。最も誤答の頻度が高かった検査は文字抹消検査で、33 人中 27 人で誤

表4 文字抹消群とpartA群の比較

	例数	年齢	Kohs IQ	SLTA	文字抹消検査		trail making test		
					正答率(%)	時間(秒)	partA 時間	partB 時間	比率
文字抹消群	13	50	108	191	97	171	127	245	1.9
partA群	14	61 *	87 *	176	93	208	199 *	301	1.5

\* p<0.05

表5 誤答少数群と誤答多数群の比較

	例数	年齢	Kohs IQ	SLTA
誤答少数群	21	56	95	188
誤答多数群	12	55	95	177

表6 誤答少数群と誤答多数群の成績の比較

	数字抹消検査		文字抹消検査		perceptual speed		symbol digit modalities		trail making test		
	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	時間(秒)	正答率(%)	到達数	正答率(%)	到達数	partA時間	partB時間	比率
誤答少数群	99.3	172	98.7	198	98.4	385	97	29	176	313	1.8
誤答多数群	98.5	147	91.1	176	97.7	470	96	31	151	211	1.5

\*\* p<0.01

答を認めた。誤答の大多数は目標を見落とした omission error であった。文字抹消検査の誤答数が健常群と同程度である群（以下 誤答少数群と略す）と、健常群より誤答数の多い群（以下 誤答多数群と略す）とに分けて検討した（表5）。誤答少数群は21名、失名詞失語7名、Broca失語8名、Wernicke失語6名で、誤答多数群は12名、失名詞失語8名、Broca失語2名、Wernicke失語2名であった。この2群間では年齢、Kohs IQ、SLTA 得点に有意差を認めなかった。表6に誤答少数群と誤答多数群の成績を示す。正答率は誤答少数群に比し誤答多数群で低い数値を示した。逆に所要時間の点では誤答少数群は全般に所要時間が長い、あるいは制限時間内到達数が少なく、これらのことから、誤答少数群は急がず慎重に課題を行っていることが推察された。一方、誤答多数群では早く多量に処理するが誤りが多いことが示された。この群に属する症例は失語症に加え、いわゆる注意障害をあわせ持っているものと考えられ、失語症に対する言語訓練を進め

る上で、持続や切りかえなど、注意の問題に十分配慮する必要があることが推察された。

【まとめ】失語症患者33名に注意の検査を実施した。失語群は、正答率は良好であったが、64歳以下健常群に比し所要時間が長い傾向を示した。失語型別では Wernicke 失語で正答率が最も低く、また所要時間が最も長い傾向を認めた。文字抹消に最も時間を要する症例は trail making test partA に最も時間を要する症例より、全般に正答率が高く、所要時間が短い傾向を示した。文字抹消検査において健常群より誤答の多い誤答多数群は、他の検査においても課題の処理は早い誤りが多く、失語症に加え注意障害をあわせ持つと推察された。これらの症例では言語訓練の施行上、注意の問題に十分な配慮が必要と考えられた。

【文献】

- 1) 鹿島晴雄, 半田貴士, 加藤元一郎, 本田哲三, 佐久間啓他: 注意障害と前頭葉損傷. 神経進歩, 30 (5): 847-858, 1986